

2016.12.13(火) 飯田人形劇場
地域ぐるみ環境 I S O 研究会
設立 20 周年記念式典
「地域ぐるみ！次へ！」トーク
研究会代表 萩本 範文

皆さんこんにちは。リレートークの最後でございますが、お別れの挨拶をしようと思っていたんですけども、トドメを差されて、ストーリーが変わってしまうなあと思っていますけれども、「地域ぐるみ環境 I S O 研究会」がこうして皆さんと一緒に 20 年目を迎えることができたというのは本当に嬉しく、感謝を申し上げたいと思います。

先ほど写真で思い出していたんですけども、「綾小路きみまろ」さんの「あれから 40 年」風に申し上げますと、「あれから 20 年」であります。「あの頃の私も若かったなあ」頑張ればゴルフも 90 台の安定スコアのプレーヤーになれて、みんなに馬鹿にされずにすむと信じておりました。陰では皆さん下手だなあと思っていたに違いないのですが。あれから 20 年、今では腰が痛くて、足がしびれて、クラブはとうに我が家の粗大ゴミであります。無理して買った会員権、あのとき、そのカードは割引券、あれから 20 年、今じゃ年会費だけを払うカードローンに変わりました。あの頃会社はどん底だったんですが、やることなすことに手応えがあり、上り階段を駆け上がっても息は切れませんでした。あれから 20 年、今じゃ動けばみんなの邪魔になる、動かなければ眠くなる。これが 20 年でございます。何と長くて、早い歳月かと思っています。

まあ、ここまではジョークでございます。

私は 1996 年にひよんなことから、牧野市長と東京で出会いました。どん底だった地域経済を何とかしよう...などと夢を見て、何とかすれば何とかなると思っていました。お互い飯田の者同志だとは知らず、名刺を交わして初めて知りました。牧野さんは、その時東京駅の前のあのノッポビルで活躍する日本開発銀行の有望な若手バンカー。それが今では、飯田のベテラン市長であります。一方で、その開発銀行の隣りにありました国の代表格だった金融機関・日本長期信用銀行は経営破綻し、そこで働いた仲間のバンカー達はどこへ行ったやら。

その 1996 年はバブルが崩壊し、5 年ほど過ぎた年でした。私たちは、バブルの崩壊で散々な目に遭い、さらに不良債権問題や株価の低迷によって、大手の金融機関が次々と経営破綻に追い込まれ、七転八倒の苦しみの中にありました。当社でもいままでやって来た仕事が極端に少なくなり、幾つもの協力工場が倒産しました。社内では力と勇気のある人には、自分で自分の道を切り開いて欲しいとお願いして、1 割ほどの社員が会社を去っていきました。

金融機関からは資産を売って金を返せ、新たな運転資金は貸すことはできない、というような合唱でした。当社は、やむなく東京本社を縮小し、その本社を飯田に移して、東京勤めの社員の大部分を飯田に転勤させるなど、身を縮める策をとりました。

そんな苦しい情勢の中、「日本の不況を地域から救おう」という運動のことが、日経新聞の全面抜きの記事で掲載されました。それを見て、私は居ても立ってもいられなくなり、東京へ飛び出し、すぐ、その運動に参加することにいたしました。

この話の続きをする前に、少し当時のアメリカ事情についてお話ししたいと思います。1980年代のアメリカは双子の赤字を抱え、苦しんでいました。日本から輸出する車がアメリカの雇用を奪っている、とジャパンバッシングが起こり、日本車をデトロイトで焼き討ちにさえしたりする、事件があったのもこの頃です。映画俳優でもあるロナルド・レーガン、元カリフォルニア州知事が経済の立て直しを旗印に、1981年の1月21日に大統領に就任し、みごとにそのアメリカを再興させました。逆に日本は今日までも続く、長期の凋落がそのころから始まったと言われています。1985年のプラザ合意で「円とドル」の為替は大胆に修正され、輸出型の企業には大打撃を与えました。

余談ですが、いよいよ来年1月から始まる、トランプ大統領の「アメリカ第一主義の考え方」は、そのレーガン大統領の政策によく似ているような気がします。日本の経済にどう影響するか、年明けからのトランプ・アメリカを、とても心配しています。ま、それはともかく、アメリカでは同時に、ITなどの新しい産業が次々と誕生し、アメリカ復活の偉大なエンジン役となりました。

その不況から、アメリカが立ち直っていく一連の流れを学び、日本に持ち帰った若者達が大勢居ました。そして、彼らは日本を救おうと立ち上がり、東京でSVJという組織を創りました。それがスマート・バレー・ジャパンという組織でした。

アメリカに元気を取り戻した、ビル・ゲイツやスティーブ・ジョブズのあの事業と、それを育んだシリコンバレー地域の成功モデルを、日

本に展開しようという運動で、『IT産業で日本の経済を救おう』というものでした。1980年代にアメリカに駐在経験のある若手の官僚や、シンクタンクのエリート、更には情報機器メーカーの若手の技術者、はたまた牧野市長のような銀行系のエリートたちでした。

私は、会社の業績に苦しんでいましたから、藁をも掴む気持ちで一人東京へ飛び出し、この運動に参加いたしました。そのとき東京に50人位の若者が集まりましたが、大部分は東京や大阪などの大都会の人たちで、地方からの参加した人は私だけでした。それ以降10年ほどこの運動は続きましたが、その時一緒に活動した仲間の幾人かとは、今も付き合いがあり、全国各地で地域振興の運動に取り組んでいます。牧野市長ともその時以来、「地域経済を元気にする」を目標に、共に活動してまいりました。

私は、東京へ出て彼らと論議をし、学ぶ一方で、その智恵を飯田に持ち帰り、地域の小・中学校のIT化や、企業のインターネット環境の整備に取り組みました。まだその頃、インターネットという言葉は存在しませんでした。マルチメディアと言っていましたが、その分野に造詣の深いコンピュータ学校の皆さんや市役所の若手の皆さん、学校の先生方にも協力いただき、土・日をかけて校舎に配線工事をしたりもしました。田舎に住む子供たちが、都会の子供たちに気後れするようでは可哀想だ、というのが私たちの運動でした。

一方で、私は製造業の幹部なので、不況からの脱却には製造現場を強くするしかないと考え、地域で多くの従業員を抱える事業所に、『現場を強くする運動』を始めませんか？と、当時の平和時計やオムロン飯田の社長さんを、それ

それぞれの会社にお訪ねし「改善研究会」の設立を呼びかけました。

当時の松島社長や坂本社長はそれを快く受け入れてくれ、3社で現場改善運動『3社改善研究会』を始めました。お互いの製造現場を完全公開し、生産技術者達の交流を始めたのです。毎月持ち回りでそれぞれの会社の現場に入り、問題点を指摘し合い、それを改善する活動でした。この交流会は当時からすれば、ある画期的な運動だったと思います。

今まで行き来がなかった会社の社員が、交流することになり、現場を強くすることもできたと思います。勿論、多摩川精機はその中の劣等生、教えてもらうことばかりだったのですが。以降、三菱電機さんにも加わってもらい、15年間続きました。量産経験のなかった多摩川精機からすると、そこで教えて貰った技術を応用し、その後、いま事業の柱になっている「ハイブリッド自動車用」センサの、量産事業を始めることができたのです。

そして暫くしたころ、世の中では環境ISOが話題になり始めました。

その認証を取らないと、ヨーロッパへの輸出ができなくなるというような話でした。そこで、再び平和時計とオムロンさんに「環境ISO」を、地域ぐるみで取るような運動をしませんか？と問いかけました。

環境改善運動は、企業の垣根の中だけで取り組んでも、意味はありませんよ。空気を吸えば垣根の外の空気を吸うことになるし、水を使えば垣根の外の川へ流れ出すことは当たり前の話です。ここでもまた、それぞれの社長は快く

賛同してくれました。

また、ちょうどその頃、私はIT化の運動などで、飯田市の若手の職員の皆さんと交流を始めていたので、当時、企画に見えた北原重敏係長、後の企画部長さんですが、「市役所で環境運動を立ち上げませんか？」と提案しました。そして、北原さんは市民に自由に集まって貰えて、自由に環境問題について論議し合える「エコタウンサロン」という場を市役所の中に創ってくれました。環境に関心の高い皆さんが、当時30～40人集まったと思います。そしていろいろなことを皆で話し合いました。それから暫く経て、こんなワイガヤの論議ばかりでなく、何か皆で事業を起こそうよと提案いたしました。「エコハウス運動をしたい」と言った方がいました。「地域資源の循環型産業を起こす」と言った方も出てまいりました。またまた、そのようにして幾つかの運動が始まりました。

私は、既に3社で合意していた「環境ISO」を一緒に取る運動を提案し、実行に移すことにいたしました。そして、市役所にも、先ほど市長がおっしゃったように企業と同格の一事業所として運動に加わって欲しいと、お願いしました。更にその輪を大きくするため、私は旭松食品さんと三菱電機さんを訪問し、最終的に6社で「地域ぐるみでISOに挑戦しよう研究会」をスタートさせたのです。それが1997年のことでした。

ちょうどCOP3といわれた、京都で開催された、第3回気候変動枠組条約締約国会議、通称、地球温暖化防止会議ですけれども、それが開かれた年でした。そして、その同じ年トヨタ自動車は、したたかにもその後『環境対策車』の代表になったハイブリッド自動車「プリウ

ス」を発売したのです。環境に関心の高まる中、その絶妙なタイミングで環境対策車を発売するその戦略に本当に敬服したものでした。

3年後の、2000年には飯田市役所が環境ISOの認証取得を終え、メンバー事業所全てが認証されました。飯田市は、自治体としては長野県で初めての認証となり、一躍、環境に先進的な自治体として、その名が世の中にとどろき、私も立ち会いましたが、認証通知の日には、開闢以来というような報道陣が、市長室に押し寄せ、田中市長を取り囲みました。

こうして認証取得という、最初の目的が達成できましたので、会の名称を『地域ぐるみ環境ISO研究会』へと改め、新しいステージへと進むことになりました。いよいよ市民運動のスタートです。

それからの運動は、地域に環境意識を向上させること、環境改善の輪を広めることを目標に、ISOという国際規格に依存しない地域独自の「環境改善規格」を創設することにいたしました。それが「南信州いいむす21」という地域版の環境マネジメント規格でした。

会員の皆さんの中から、ISOの審査員の資格を取る人が増え、相互内部監査の仕組みをつくりました。また、市役所は税金を使って、お金の掛かるISOを維持するのは難しいと、自己適合宣言という方法に切り替え、環境ISOの認証事業所の登録を返上しました。

こうした地域運動は、次第に全国に知れて、雑誌や新聞などの取材が多くなり、各地から視察者が絶えませんでした。そして、幾多の表彰を頂くことにもなりました。先ほども紹介のあ

りましたが、思い出すその代表は、秋篠宮様から直接伝達された『第13回地球環境大賞』の「環境市民グループ賞」でした。2004年の4月26日、東京の明治記念館に招待され、非常に緊張はいたしましたが、大変すばらしい授賞式でした。そのとき、トヨタ自動車からは張当時の社長が出席され、『エコ・カー開発におけるハイブリッド車の評価を不動なものにした』という理由でグランプリに当たる大賞を受賞されました。

またその折、秋篠宮妃の紀子さまから、私に「飯田のリンゴの花はもう咲きましたか？」と尋ねられました。そのおやさしいお声を、今でも印象深く思い出します。

その他にも、沢山の事業に取り組んで参りました。全国に知れわたったことで、「環境自治体会議」が「いいだ会議」と銘打って開催され、全国から環境に造詣の深い皆さんが、この飯田に大勢集まりました。そして地域のいろいろな場所に分散し、大きな環境会議が行われました。飯田の市民運動を紹介する機会となり、飯田という町を知っていただく機会にもなっています。

省エネを目標に、消灯運動やノーマイカー運動を企画しました。市の催した「生活と環境まつり」では、活動報告の展示をしたり、従業員で協力してドングリを周辺の山から集め、子供達によるクラフト作りに挑戦してもらいました。子供達に地域の自然に親しんで欲しいとの意図でした。

また、2001年に第1号を発行した機関誌「ぐるみ通信」も、いよいよ15年続いて、来年の早々には350号が発行できると思います。

会員相互の情報交換、あるいは環境に取り組む皆さんへの激励に繋がったと思いますが、これも、執筆・発行を担当された皆さん、とりわけ市役所の小林敏昭さんのご尽力に感謝をしたいと思います。

更に、環境マネジメントシステム「南信州いいむす21」は地域に定着し、一昨日の南信州新聞でも掲載されましたように、地域にある60の事業所が認証をとられました。建設業にとっては工事入札の加点要件にもしていただきました。その審査などは、私たち研究会の内部監査員がボランティアで勤めていますが、認証書は「南信州広域連合長」すなわち飯田市長が授与されています。

当初、研究会の活動として取り組むことを考えましたが、それでは受理する事業所に、有り難みが湧かないし、長続きもしないだろうと考え、南信州広域連合に授与者になっていただくようお願いいたしました。でも、その意図を伝えるのに随分苦労いたしました。広域連合事務局や広域連合幹部の皆さまに何度も面談し、お願いをさせていただきました。そして、ようやくそれが受け入れられ、今では牧野広域連合長から認証書の授与される様子が、毎回地域の新聞などに掲載され、それぞれの事業所の環境配慮の活動が広く市民に紹介されていることを、企画した私たちは、本当に良かったなあと思っています。地味な活動とは思っていますが、この市民意識の高揚策が、更に次の環境改善運動へと繋がったらいいと思っています。

こうして、私たちの運動は定着し、現在研究会加盟の事業所は28社となり、従業員数では7000人に及ぶ参加者の運動となりました。

自画自賛で申し上げれば、自治体の進める環境行政の推進に、幾らなり貢献できたのではないかと考えています。ごみの有料化のときも、ごみの分別の時も、レジ袋の辞退運動も、どの自治体でも苦勞しているテーマが、当地域で上手く行っているのは、企業の従業員を通じてやって来た環境意識の高揚運動が、いくぶんかは下支えになったのではないかと考えているところです。

はじめは、地域を不況から救いたいと考えて始めた運動で、製造業が中心だったのですが、今やいろいろな業種の事業所や学校などにも参加いただき、正に「地域ぐるみの環境改善運動」に育ってきたことは、長いこと代表を務めさせて頂いた私にとっては、望外の喜びであります。

とは言え、足かけ20年となり、この運動を新たなステージへとステップアップさせなければいけません。最近では、環境教育とか、省エネとか、いいこすいいの「温室効果ガス削減運動」など、新しい挑戦を始めていますが、COP3当時の環境運動と、COP21の今日の運動とでは少しずつ様相も変わり、世界での論議も次第に新しい段階へと、進んでいるように感じています。環境がそれぞれの地域、それぞれの国の事情によって解釈が変わったり、取り組みにもバラツキが目立ちます。でも、どんなにそれぞれの国が声高に主張をしても、環境問題が地球上から消える訳ではなく、益々難しい局面へと移行しているように感じます。

一昨夜のことですが、ある会合で日本ミツバチの養蜂家とお話をしました。彼はこだわって日本ミツバチを飼い、蜜を採取していました。しかし、彼の大事なミツバチが最近絶滅したと

悲しがって語ったのです。日本ミツバチは日本の自然と共存し、古くから愛好家に貴重なミツバチとして飼われてまいりました。でした。この地域でも山間地にはよく住み、養蜂家によって飼われても来ました。それが「気候変動が原因のような気がするが全滅した」とこぼして言うのです。更に彼は、「このところ地蜂もめっきり少なくなった。これも気候変動が原因かもしれない。人間には分からない変化が小さな昆虫の命を奪っている」と、南信州新聞で今日のイベントのことを知って、私に訴え掛けられました。

このように私たちの回りから地球環境は確実に変化し、温暖化は食い止めようもないのが現実です。世界各地で起こっている異常気象と甚大な被害とは無縁でもなさそうですし、有史以来というような災害が次々に起こって、益々人類は重い課題を抱え始めているように思います。

さて私は、今日のイベントを境に代表の役を降板しますが、この20年間私を支えていただいた皆さんに、もう一度お礼を申し上げたいのです。特に各事業所の実務者の皆さんにはそれぞれの業務の枠を超えて活躍頂きました。先ほどお話した「南信州いいむす21」の審査業務はその一例です。

その献身的で、かつ豊富なアイデアに支えられ、私はここまでやって来られたと思っています。また、その実務者の皆さんの活動を温かく見守り、支援してくれた、事業所の代表者の皆さんにも深く感謝を申し上げたいと思います。

これからの、新しい時代への取り組みは、新しい代表者の下で、持続可能な地域づくりのた

め、新しいテーマを見つけて、挑戦してくれるものと信じています。ぜひ、今までにも増して、新代表に対し皆さまの厚い、ご支援をお願いしたいと思います。

何度も申し上げますが、環境問題は、『自然と人間が如何に共存するか』がテーマであり、永遠の課題と思います。11年後にはリニア中央新幹線が開通し、この地域には希望に満ちた未来がやって来ると思いますが、同時に、大都会との共存という、大きくて新しい課題を抱えることにもなると思います。この会がそうした課題に正面から向き合い、先進的に取り組み、住みよい地域、サステナブルの地域の発展に寄与して欲しいと祈念して、私の話を終わりにいたします。

本当に長い間、有り難うございました。

